

ピエール・ボナール展 オルセー美術館特別企画

国立新美術館（東京・六本木） 2018.09.26～12.17

「オルセー美術館」は、フランス・パリにある 19 世紀美術専門の美術館で、印象派の画家の作品が数多く収載されていることで名高いが、もとは長距離列車のターミナルで、かまぼこ状の大屋根の地下に 10 線ものホームを備えていた。



「ピエール・ボナール」(1867～1947)は、ポスト印象派とモダンアートの間での「ナビ派」で 19～20 世紀に活躍したフランスの画家で、“情熱的な色合いを使い、明るい陽の光と影を表現した”画家である。

この「ナビ派」は、「ゴーガン」の周囲に集まった若い画家たちが結成したもので、「ボナール」は日本の浮世絵の影響を受けながら、躍動的で装飾性に富む作品を数多く制作している。

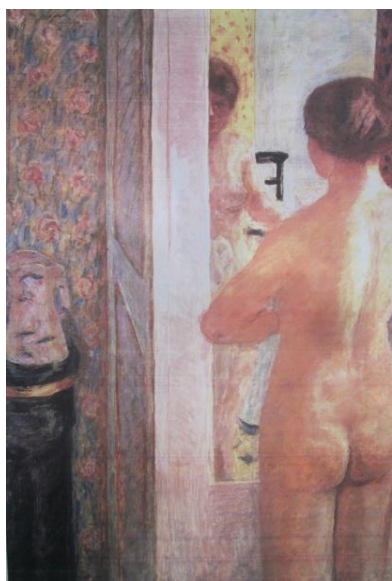
《ル・カネの食堂》 1932 年頃 油彩カンヴァス

晩年過ごした南仏ル・カネで風景、室内情景、静物などの身近な題材を描いた作品の一つである。

本展は、「オルセー美術館」の協力を得た大規模回顧展で、「ボナールの絵画、素描、版画、写真など 140 点の作品」による魅力一杯の企画展の開催である。

展示作品は、年代順・主題毎で、1. 日本かぶれのナビ、2. ナビ派時代の版画作品、3. スナップショット、4. 近代の水の要請たち、5. 室内と静物、6. ノルマンディらの風景、7. 終わりなき章からの構成で展示されている。

ピエール・ボナール 《化粧》 《身づくろい》 1914 年 油彩/カンヴァス



画伯は、ナビ派の中で最も日本に影響を受けた画家で、装飾的なスタイルは「浮世絵」の平板な色面構成に学んだものとされている。

作品は、大胆な垂直の要素で大きな鏡の縁や画面の上下を貫く部屋のドアが、縦の強いリズムを作って堅固な構造を形づくり、同時にそれが画面をいくつかの領域に分割し装飾的效果を生み出している。

単純構図であるが、光は右側後側から柔らかく差し込んで、モデルの肌に真珠のような光沢を与え、優美な曲線と鏡の幾何学的形状で一層輝きを増して、静かな単色の平面と装飾的なパターンで動きを与えられた平面の対比が巧みである。